

趣旨説明

有 地 亭

今日の日本人口の高齢化は周知のように、大規模に、しかも急速に進んでいます。六五歳以上の高齢者の割合は一九八九年、総人口の一・六パーセントに達しています。この勢いはますます加速化されており、厚生省人口問題研究所の推計では、高齢化がピークに達する二〇二一年頃には、四人に一人近くが六五歳以上になるとされています。

高齢者に対する対策は国、地方公共団体などの公的扶助においてきめ細かい対応を十分に考えていただかなければならないわけですが、この点については、本日の報告の中で、地域福祉に特色ある施策を実行されている大阪府について、家常先生のお話しがございます。

このような地域福祉を補うものとして高齢者をめぐる家族のいろいろな面での援助をも同時必要としております。地域福祉と家族の援助の二つが一体化してはじめて高齢者に対する十全な対応が可能になって参ります。

本日は、この後者の点の一つの問題、高齢者と成年に達した子との関係を中心にして、どんな関係を取り結んだらよいかについて、多くの先生から御報告を願うことになっております。

この面では、日本は、あるいはアジア型と言うのでしょうか、これまでは、三世代世帯で、親と同居している子夫婦、とくに、子の妻が高齢者の親の介護に当たるといふ型が多いとされています。

一九九一年、六五歳以上の者のいる世帯について、世帯構成別にみると、三世代世帯が三八・五パーセントでもっとも多い。もっとも多いけれども、これは減少の傾向にあって、一六年前の一九七五年と比較すると、二五・七ポイント減少しています。これに対して、六五歳以上の夫婦世帯、単独世帯が著しく増加しています。

このような変化は見られますが、今日ないしこれからの状況の下で、高齢者の介護、援助として三世代同居家族が今後も一番有力な高齢者に対する援助の型として機能すると考えてよいのか、成達に達した子や親の意識、実態はどのように変っていくのか、本望に望ましい親子関係はどんなものか、これらがまさに本日の諸先生方の御報告で明らかにされることになっている事柄であります。

ヨーロッパでは、三世代世帯が少ないことは御存知の通りでございます。高齢者対策に関して、それぞれの国が異なった対応をしているように思われます。

旧西ドイツについては、本日、メーワルト先生によって御報告をいただけることになっております。ヨーロッパの高齢化社会に対する対応の仕方はそれぞれの国が長い年月をかけて、その国の

国民性を生かすような方法での対応策をとっております。また、それを可能にする時間的余裕もあったのではないかと思います。

人口の高齢化のスピードについて、日本とヨーロッパ諸国とを比較すると、六五歳以上の高齢者が総人口の中に占める割合が五〜一二パーセントになるまでの年数について、日本は四三年間（一九五〇〜一九九三年）であります。これに対して、ヨーロッパ諸国では、六〇〜一七〇年間かかっているようです。日本は一番スピードが早く、短期間で高齢化社会になろうとしています。本望に国民性に合った対策ができるのであろうかと、多少不安を覚えております。

イギリスでは、社会保障制度が早く整備され、いろいろ変化はあったけれども、日本よりははるかにボランティア活動が定着しています。エイジ・コンサーンという高齢者ケアの民間組織があります。そのほか、各種の民間団体、ボランティア組織、公的機関で構成された援助組織が活発に活動しています。ディケアクラブでも、家族の枠を超えて、年少世代が年長世代の世話をし、自分たちも将来若い世代の人たちによって援助を受けようという、ボランティア活動がそれなりに実を結んでいます。

フランスでも、高齢化は進んでおり、親子は同居しなくて近居していますが、人口一五万位の都市では、親子の週一回の交流が七二パーセントにも上るといふ調査結果があります。また、農村では、広い家の敷地内に親夫婦、子どもの家族が別の世帯でそれぞれが別個の生活をし、週一回位、親の家屋で全員が会食し、交

流するという親子関係を形成しています。

これらをみても、それぞれの国で、その国民性や社会状況を生かして、高齢者への対応を考えているように思われます。

日本の場合には、あまりにも急速に高齢化社会に入ったために、これらの国とは異なって十分な対応をゆっくり考える余裕もない差し迫った状況にあります。しかし、高齢者問題は避けては通れない、シリアスな問題になっております。

そこで、本日は、わが国で、三世代世帯は従来の対応の仕方ではございますけれども、改めて親子問題を問い直し、新しい親子関係を模索するというのが、このシンポジウムの課題でございます。

本日の会を主催する比較家族史学会は家族に関心をもついろいろな学問分野の研究者によって作られた学会です。本日、御報告していただく諸先生も法制史、社会学、歴史学、文化人類学などの種々の領域の先生方でございます。

親子関係について、従来とは違った新しい考え方、ヒントを得ることができるのではないかと期待しております。

甚だ簡単ではございますが、以上をもってシンポジウムの趣旨を説明させていただきました。